

時は流れても

事業計画課長 宮野 祐彰



4月の異動で事業計画課長に着任しました宮野です。よろしくお願いいたします。

事業計画課には30年程前のS56に国営調査係員として5年間在籍しており、二度目の勤務になります。

小職が在籍していた時期は、富山、石川、福井地域は農政局直轄で地区調査を行っていた時代（能登土地改良調査事務所は能登地域に特化）で、黒部川沿岸（S56）、福井平野（S57～S59）、佐渡（S57の1年のみ。その後は水系が担当）、射水郷（S60）と大変多くの地区を担当し、1年のうち1/3は出張し、データ収集をしており多忙な時代でした。

思えば当時の不規則な生活（食生活は中華系が中心）が今の体型を作ったと思われる。

当時、計画部内の事務機器の環境は今と較べると信じられない状況で、部内のOA機器はコピー（白コピー：何故か呼名は「電デコ」、青焼コピー）とFAXのみでした。

S57の地区調査申請（佐渡、福井平野）するにあたり、広域調査担当から貰った図面を見て、「これで本省ヒアリングに望むの？」と思うレベル。せめて一般計画平面図くらいは「見た目勝負」と言うこともあり、技術者として最大限の努力をすることにしました。

からすぐち

用排水路の線の太さを一様にするために「烏口」で着色。凡例は下手な手書き文字でなく活字にするため、慣れない反転式のタイプライターで文字を打ち拡大コピー。

青焼（Aゼロ版）は局の地下に青焼室があり、おじさんの機嫌を損ねないように丁寧に頭を下げてくださいとお願いして焼いて貰う等、今思えば懐かしい時代でした。

また、ヒアリング資料は今のコピー機のようにボタンを押せば簡単に帳票してくれる状況ではなく、湿式の青焼きコピーしたあと、人間ソート。当時、白コピーは単価が高いので安い青焼き（一枚づつセットし、ガッちゃんと言がする。時々、原稿が巻き付きベタベタになってしまいます）。部数は最低、7部

ほど必要なため、電車時間から逆算し、コピーします。そんな状況でやっとヒアリング資料ができ上がると、スキーバックのような大きなキャスター付きに資料を入れ東京へ。係員は資料を運ぶのが仕事なので、重くて肩紐が切れそうになりながら、階段を登り降りした記憶があります。

さて、計画部では特殊車庫（今は車専用）に色々な測定機材を保有していました。例えば減水深測定器（通称：だるま）、パーシャルフリューム^{※1}、流速計、水位計（水圧式、フロート式）、テンシオメーター^{※2}など。（当時の機器は今はどうなってるのでしょうか？）

当時は直営でデータを収集するのが当たり前。黒部川沿岸の時は自前でペイント等を施した木製のパーシャルフリュームを作り、水田の取水口に設置。（これが好評で佐渡や福井平野でも活用）

射水郷では排水路に直営でフロート式水位計を設置し、排水解析に必要なデータ収集。射水郷地区はタイミングがよく、水位計を設置したあと大洪水があり、解析に必要なデータが上手くとれ、解析データと実測値がぴったし合ったことが自己満足です。

地域整備方向検討調査や地区調査段階では「あれもこれもしなくては・・・」なんて予算を配分すると、現況調査にかかる費用がない。また、調査期間も2～3年程度と短期間な事から、データ収集する時期を逸すると1年間無駄になってしまいます。OA化が進んでも基礎データの収集は非常に重要です。

小職の経験談になりましたが、調査を担当する計画マンとして参考にして貰えると幸いです。

※1：パーシャルフリューム

水路の途中に絞り部を設けた流量を求める測量機器

※2：テンシオメーター

土壌水分を計測する計器

